

## 第7回スリランカ紀行

2018年3月5日～2018年3月28日

3月5日 雨

今回は松坂さんと同行。松坂さんは12日に帰国予定。

砂津バス停で待ち合わせる。

11時27分発福岡空港国際線行きのバスで、空港へ。

午後1時20分空港到着。

チェックインまで多少時間があるので、昼食をさきにとることにする。

朝食後、大韓航空のチェックインカウンターには長い行列。しばらく並んだが一向に進む気配がないので、前のほうに確認にいくと、チェジュ行きのLCCの列だとわかり、再度自分たちの便の列に並びなおす。

チェックインが済んで、安全検査の列に並んだ後、松坂さんが米ドルが必要なことを思い出して、銀行に両替に行く。

100ドルを両替して、また安全検査へ。

ちょうど、搭乗開始のアナウンスで、待ち時間なしに搭乗となった。

1時間あまりで韓国インチョン空港に到着。

ここでの待ち時間が長いので、簡単な夕食をとったりしても時間をもてあます。



コロンボ行きは大韓航空 KE473、10時55分定刻出発。

3月6日 曇

午前4時30分コロンボ到着。正確には「バンダラナイケ国際空港」バンダラナイケは元の大統領の名前からとった。

コロンボはスリランカの首都ではなく、「スリ ジャワワルダナプラ コッテ」が首都の名前。バンダラナイケ空港もコロンボからは離れた場所にある。

空港にはいつもの運転手スジークが迎えに来てくれている。最も信頼できる運転手で、約束の時間には早めに来る。

国道に出ると沿道に銃を持った兵士の姿が見える。スジークに聞くとキャンディ市内で暴動があったと言う。あとで分かったことだが、スリランカ全土に非常事態宣言が出ていたからだった。

キャンディへの途中で、朝食をとる。ストリングホッパー。日本のそうめんみたいな米の粉で作った細い麺をぐるぐる巻いたようなものをカレーと一緒に食べる。

松坂さんは初めて自分の指を使って食べる。

ストリングホッパーの後は甘いミルクティー。

8時過ぎに WDC (Woman's Development Centre) に到着。Centre のつづりはこれで OK.ここはイギリス英語なので、語尾が「re」となる。

WDC は男性と女性の権利が等しくなることを目的として、主に恵まれない女性たちの自立を助ける活動をキャンディを中心に行っている。

WDC 本部であいさつして、WDC のショップ「Sthree」へ行く予定が店を通り過ぎてしまって、キャンディ市内へ。



(人工湖沿いの道路で)

キャンディはスリランカ第二の都市で、人口は周辺部を加えて約50万人。ちなみにコロンボは約350万人。スリランカ全体の人口は2050万人。

松坂さんは飛行機で寝られなかったらしく、足が痛んで大変そう。

3月7日 晴

朝食前に、カメラを持って付近を散歩。



(アニューラガマ 朝の風景)

猿の写真を撮っていたら、軍人を名乗るバイクの男にとがめられる。このときは理由がわからず、二人で憤慨。

後で、キャンディで非常事態宣言が出されていたことを知る。



(電線を渡る猿)

朝から先生たちが来ない。バスが止まっているらしい。

午前中子どもたちはカウンセリングの先生が来ていて、二階でゲーム形式の自己表現練習をやっている。しばらく見学。

計画では日本から持ってきた写真を模造紙に貼って、展示する予定だったが、できずじまい。

午後、ラリタの提案で、二階で組紐の実習を新人にすることにした。

3月8日

今日もバスが動いていないらしい。

ネットもつながらず、わけの分からない状態が続いている。

3月9日

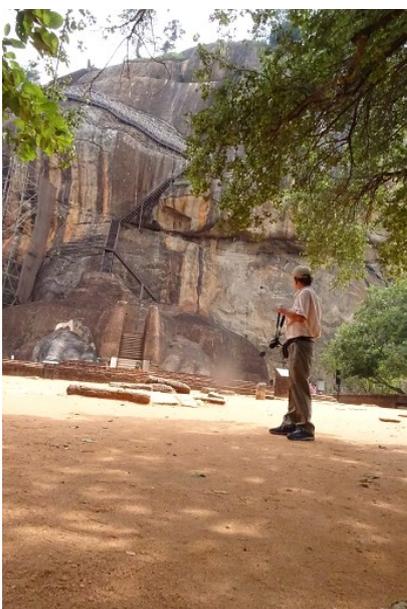
スージーワと松坂さんと三人で午前中キャンディの市内に出かけ、そのまま文化三角地帯のツアーに出かけることにした。

キャンディへ向かう路上には兵士が銃を構えて立っておりものものしい雰囲気。

キャンディでは私がスーパーで買い物をしている間、松坂さんは宝石店を見に行くことにした。

11時ごろから、シギリヤに向けて出発。シギリヤロックに登る。

ここの入場料は来るたびに高くなっている。



(シギリヤロック ライオンの足)

なんとか頂上まで到着。

このあと、ポロンナルワに向かう。

ホテルにチェックインして、6時過ぎにスージーワに夕食をテイクアウェイ（日本ではテイクアウトとアメリカ風だが、こちらではテイクアウェイが普通）を買ってきてもらうことにした。われわれ二人はビールが飲みたいと思ったけれど、店は午後4時で閉まっている。

ホテルのマスターの知り合いのついでで、なんとか調達してもらって、酒盛り。

ビール代もあって、このホテルはちょっと高め。

3月10日 曇

午前中ポロンナルワの遺跡群を見学。



(ポロンナルワの遺跡)

ガル・ビハーラの大仏を背にして写真を撮ったら、全部消されてしまった。  
仏様を背にして写真を撮ってはいけない。

ポロンナルワからアヌダラプラへ向けて移動。

ミヒンタレーの岩山に上る。

ここの石段はなかなかきつい。 頂上までいかず、広場で引き返す。

ミヒンタレーは最初に仏教が伝わったといわれる土地。

ここから、アヌダラプラまでは近い。

アヌダラプラではツインポンド、サマ・ボディ仏、ムーンストーン、ルワンウェリサヤストゥーパを見学。



(ツインポンド 昔の王様のプール 二つあるのでこの名前)

ホテルにチェックイン。

ここのホテルは値段も手ごろでまずまず。

3月11日

松坂さんは足の具合が悪く、歩きたくないので、予定のダンブッラでは山のぼりをしないことにする。



(ダンブッラの金色仏)

金色の仏様を写真に収めるだけにして、空港へ向かう。

途中、クルネガラで、紅茶の買い残しを買う。

クルネガラから空港に向かう途中、あと 10Km ほどのところで、我々の車はトレーラーに追突される。



追突した大型トレーラー

後で聞いた話ではトレーラーの運転手は無免許で、金も持っていなかったという。  
三人とも幸い身体はどれも無かったが、話は簡単に収まらない。  
それでもなんとか空港には間に合った。  
松坂さんは午後7時の便で日本へ出発。

3月16日



ラリタにカレーの作り方を教わる。  
今日作るのはニンジンのカレー。

今は、施設の改築中なので、トタン葺きの古い調理場で調理する。



カレーにカラピンチャの葉は欠かせない。



薪を燃やして鍋を火にかける。

3月17日（土）

スジーワとヌワラエリヤに出かける。

ヌワラエリヤは世界的に有名な紅茶の生産地。標高 2000m の丘陵地帯に茶畑が作られている。



滝をバックに筆者。  
ここまで、国道から 100m ほど、  
下ってこなければならない。

ランボーダの滝



茶摘みの女性たち。



ヒンズー教のお寺

この辺りはタミール族が多く、ヒンズーの寺院が見受けられる。



ヌワラエリヤの中心部。ロータリーの向こうに郵便局が見える。1815年に作られた歴史のある郵便局。



郊外へ道の両側には急斜面に農民の家が点在する。

郊外のファームで働く人たち。

ファームは外資による経営が多く、労働者も紅茶農園に比べて生活レベルが高い。

酪農、畜肉加工を中心とした経営。



合理化した牛舎。右側の牛たちを左側に一斉に移動させて、給餌、清掃を行う。機械化、省人化が進んでいる。



ヤギの飼育場。

乳牛、肥育牛、ヤギのほか、食用ウサギも飼育販売している。



広大な放牧地。ここは高地で、  
熱帯にもかかわらず、年中一定  
の気温で、放牧に適している。



露店を開いている。

スージーワは家に野菜を買って帰る。

3月20日



Sthreeを訪ねると、ちょうど近  
所のボランティアがカレーの講  
習に来ていたので、見せてもら  
う。彼女たちのうち2, 3人

が交代で Stthree のカフェを手伝っているのだが、料理のレベルを合わせるために、今日は講習をしているのだという。



できたカレーとメニュー。

3月23日

今日はアガラマの調理場で、玉ねぎのカレーの作り方をを見せてもらう。



材料は玉ねぎとカラピンチャ。  
青唐辛子にシナモン、カルダモン。

玉ねぎを刻んだあとは、ここで火を  
起こさずに、3階のプロパンガスレン  
ジで調理する。



茶色になるまで、玉ねぎをいため、  
唐辛子と塩で味を調える。

3月25日

この日、スジワの家に招待される。



スジワのお父さん。

足が悪いのだという。

スジワは比較的豊かな生活をしている。外国人相手のドライバーは良いお客をつかむと結構な稼ぎになる。

スジワの家は森の中にある。

道路はせまく、スジワの車は大きいので、運転はうまい。

スリランカ人にしてはおとなしい運転で、あまり無理はしないが、国道で無理な割り込みをする車があると、かっとするようで、ときにはなだめないといけない。

英語はそれほどうまくないが、お客の気持ちを読むことにかけては才能がある。



スジワの一人息子。

組紐がすぐにできるようになった。英語も上手に話せる。

3月27日

今日は帰国の日。空港への途中、ペラデニヤ植物園に立ち寄る。ここはイギリスが植民

地時代に世界中の植物を集めたといわれる植物園。ランの種類でも有名。



外国人観光客が多い。  
このヤシの並木の上を昼間にもかかわらず、  
オオコウモリが飛び回っている。

もう一か所、ペラデニヤの古い寺院を訪ねる。

岩の丘の上に立つこのお寺は人影もない。



寺の中に一人、料金を徴収する人がいるだけ。もともと由緒ある寺院だという。

ここで、手書きの絵を売りながら、  
説明役をしている人の絵を求める。